

# ア ラ ス カ 探 検 学 校

一九七二年の夏、一団の少年少女たちがアラスカでのキャンプを楽しんだ。三浦雄

一郎校長の名付けてアラスカ少年

少女探検学校である。大きな美しい自然の中で、本物の汚れない自然とはどういうものか、どれほど大切なものを自分の目で見、自分の体で感じとること、一人でも生きていけるように強い心と体をもつようになること、日本からはなれて、自分の生まれ育った土地のことを考え、見なおすこと、そ

ろ、自分の生まれ育った土地のことを考え、見なおすこと、そ

ういったことが少しでもできればいい、というのが探検学校の発想だった。そのすべてが満たされたかどうかはまだ分からない。特に時間を組んで講義をする、というようなプログラムは一切、組まれなかった。自然保護についても同様であった。けれどもはじめのうち、キャンプに遊びにきたリスたちを物珍しさもあって追っかけた子供たちも、しまいにはリスが遊んでいるのが当り前だ、という顔をした。小川を群れをなして遡るサケをみて、何も教えないのに、なぜ北海道にはこんなにサケが遡らなくなつたんだらう、とつぶやいた子供も

ういったことが少しでもできればいい、というのが探検学校の発想だった。そのすべてが満たされたかどうかはまだ分からない。特に時間を組んで講義をする、というようなプログラムは一切、組まれなかった。自然保護についても同様であった。けれどもはじめのうち、キャンプに遊びにきたリスたちを物珍しさもあって追っかけた子供たちも、しまいにはリスが遊んでいるのが当り前だ、という顔をした。小川を群れをなして遡るサケをみて、何も教えないのに、なぜ北海道にはこんなにサケが遡らなくなつたんだらう、とつぶやいた子供も

## 勝谷圭一

八月六日 ロッジで朝食をす

ませキャンプ場へ向かった。キャンプ場は森の中で近くには湖があり、静かなところだ。テントを作りさあキャンプ生活の始まり。ぼくたちのグループは四年生、五年生で八人。さっそく食事の用意をしていたら小さなシマリスがよってきた。パンくずを食べさせると、かたにのっ

てチョコチョコとでもかわい。リスと遊んでいると先生に「たき木を拾ってこい」とどなられた。

夜は初めてねぶくろやエヤーマットを使

って寝た。せまくてきゆうくつだが、みんな初めてなので大ききわぎをしながねた。

八月八日 きょうは近くの山に探検小屋

を作りてグループの人たち五人と先生二人合計七人でかけた。山を一分ぐら登ったところに作ることにした。まずたくさはえてる木をりようして柱になる四本を決め、かれた木を四本切って横にわたし、それに松の葉をあててかべを作った。

あった。これこそ、私たちの求めの応えと

いうべきではないだろうか。アンカレッジから南へ約百マイル、サミット・レークが私たちのキャンプサイトである。ここを本処としてある日は氷河へ、ある時は山登りへ、またある日には魚釣りに出かけた。一番の年少者は六才何カ月か、時にはまだおねしょも危ない子供たちが何を、何を感じたか、彼ら自身に語ってもらふことにしよう。ここでは北海道から参加した十八人の作文を載せる。

## 「辻井達二」

その後からビニールのまくをかけ、屋根にもビニールをかけた。地面にはえているこけをじゅうたんがわりにして、やっとできあがった。

毎日びやく夜なので夜は十時ごろまで明るくてなかなかねむれない。トランプをしながらのテントのすき間からエサをさがしてリスがはいってきた。リスとしばらく遊んでからねた。

八月九日 きょうは早起きをして、いやいやながらたき木を拾いに行った。スワードの港につりに行くので、朝食を早めにしてバスに乗った。とちゅうムースに出



後山直久画(札幌・宮の森小)

合った。このハイウェーはムースがよく横  
ぎるのでカムースバスとよばれている。

ホーマーとスワードの間の川が、ピンク  
色にそまっているのが見えた。それは七〇  
センチぐらいのレッドサーモンが上流にた  
まごを生みに行くところだった。

スワードの町はともきれいだ。アンカ  
レッジに着いたとき、先生が「アラスカで  
はゴミをするとばつ金を取られるよ」と  
いったことを思い出した。

町のあちこちには必ずゴミばこが置いて  
あり、せいそう車が毎日ごみ集めにくるそ  
うです。ヨットハーバーで一時間ぐらいつ  
りをした。ぼくは小さなさかなが一びき。  
女の子が大きなカレイをつつた。ちよつと  
くやしい。

なんば船のところで、昼食をしたり、写  
真をうつしたりした。(札幌・宮の森小)

### 井合順子

氷河は、アラスカのたから。

氷河は、みずいろをして、

アラスカ、ポータージへ、

毎日動いている。

氷河って、すてきな。

氷河って、すばらしいな

§

わたしは、アラスカについたとき、アラ  
スカって、どんなところだろう?と思っ  
た。アラスカに着いて初めのうちは、よく  
ことばがわからなくて、こまりました。

アラスカの探検の中で一番楽しかったこ  
とはポータージ氷河へ行つたときです。わ  
たしは、氷河を初めて見て、日本の自然と  
くらべて、日本は公害があつて、空気がも  
たないけれど、アラスカは公害もないし、  
空気もきれいで、とてもいいと思う。日本  
の湖なんか、こんなすてきな氷河があつ  
たらなあと思ひました。

わたしは、もう一つ一番楽しかったこと  
があります。スワードへ魚つりに行つたこ  
とです。わたしは、一番大きいカレイをつ  
りました。わたしは、とてもうれしかった  
です。わたしは、自分で魚をつつたのは、  
初めてだったからです。

わたしは、ねぶくろのくらしは、もうち  
よつとつらいと思ひましたが、フワフワし  
て、とても気持ちよかったです。わたし  
は、外国人の女の子と友人になりました。

外国人の女の子は、とてもやさしくて、ポ  
ンプをおすの手つだつてくれました。

八月十一日私たちのグループ、エルクだ  
けでキャンプ場の近くの山へ登りました。

行くときは、すいとくとくだものと、カー  
デガンを小さいリュックに入れて、山登り

に出かけました。登っているうちに、足が  
つかれました。少し休みながら、登ってい  
るうちに、目的のところにつきました。つ  
いたところに雪がありました。川もありま  
した。雪で、こなジュースのこなをまぜ  
て、みんなで食べました。川のお水も、の  
みました。こんないいところがあるなんて  
と思ひ、日本にも、こんないいところがあ  
ればいいのになあと思ひました。

ホテルへ行つた日、その日は一番、外国  
だノと感じました。わたしは、アラスカの  
自然は、すべてすばらしいと思ひました。

わたしは、この十日間、とても楽しかった  
し、とても勉強になりました。アラスカ少  
年少女探検学校よ、ありがとう。

(旭川・知新小)

### 神戸仁

ぼくは、アラスカへ行つて一番心に残つ  
ていることは、氷河を見に行つたときのこ  
とです。

大きなバスに乗つて、初めに、目の前に  
氷河の水がういているようなところへ行き  
ました。みんな水をねらつて石をなげた  
り、写真を撮っています。正面には、雪の  
つもっているのや氷山らしいものがありま  
す。「さすがアラスカ」と思ひました。

そのうちお昼になりました。先生が「こ  
はんだよー」とよぶと石をなげていた人も  
写真をとっていた人も、やめて走つてしま  
した。このけしきを、日本の人たちにも  
見せてあげたいと思ひました。ごはんが終  
わるとまたバスに乗つて、今度は氷河の雪  
のあるところに行きました。雪のあるところ  
までだいたいあるきました。

と中で、対馬先生が「前にいる高校生たち  
が、くまでも出たら一番にくわれるな」な  
どいってわらつていました。

つくどさつそく雪合戦を始めて、古川先  
生などは、みんなに追いかけられてめっちゃ  
くちゃでした。ぼくも雪玉をぶつつけられ  
ました。そのとき、手ぶくろを落としたり  
しく、あとでいくらさがしてもありません  
でした。アラスカへ行つて落としたものは  
あれだけだったので、大切なものを落とし  
でもしたようにがっかりしました。でもあ  
の手ぶくろは上の方へ落としたから、永久  
に残っているだろうと思ひます。

氷河をおりて、石のたくさんあるところ  
で、藤井先生が大きな石に登つて、氷河が  
通るときにけずれた石をさがしました。ぼ  
くは初め、三ごひろいました。けれども全  
部おとしてしまつて、あとから五ごひろい  
ました。帰りは、もうつかれてくたくたで  
した。帰りのバスの中で、伊藤君から石を

もらいました。つかれたけれども楽しい日でした。いまでもきれいな氷河や、広い広いアラスカのことを思い出します。また、あんなきれいなところへ旅行してみたいと思つています。(旭川・知新小)

## 山根真樹

「ウヒヤー へんな水」僕はびっくりした。のどが痛い。かぜをひいたのでもないのに、いま飲んだ水は、のどにしみるような変な水だ。僕はいま、船橋のおばの家に

着いた。四時間ほど前、アラスカから羽田に着き、眠くてふらふらしながら電車をのりついで、公団アパートの四階まで上って、水道の水をいききのんだら、のどが痛くて眠けもふつとんでしまった。

あのサミットレークキャンプ場の、ポンプでくみあげた水がなつかしかった。青く底れない氷河の水のように、二、三分さわわっていたらふるえるぐらい冷たくて、澄みわたった空、高い山、そそりたつたシトカトウヒの美しさが、とけこんでいたようなアラスカの水。同じ水なのに、どうしてこんな違う味がするのだろうか。

次の日、板橋区の知りあいの家で飲んだのも、薬のようなへんな水、もっとおいしくなかったのは、東京科学博物館で飲んだ

水だった。日本の首都で、こんな水を毎日飲んでいるなんていやだなあ。科学博物館なら、科学的においしい水がつくれないのかな。いろいろな工業が発達して便利になると公害もふえていくように、科学が発達すると自然のものがこわされてしまうのかなあ。石油を地下パイプで運ぶように、アラスカの氷河の底に穴を掘って、大きなトンネルで日本とアラスカを結び水を運んでこられたらいいだろうな。キョッと蛇口をひねると、アラスカの水がとびだしてくるなんてすてきだ。

野球クラブの練習で二時間も全然水を飲まないで走りまわったあととびついて飲む水だって、本当はおいしくない水だったんだ。江別の浄水場を見学しておどろいたけれど、僕が毎日飲んでいる水は、千歳川のそれもにごつたような水。機械や薬で体に悪くないようにはなっているから、いつもなにも気がつかないでいたけれど、本当の水はきつとアラスカの水のような味がするんだらう。

僕は来年もさらう年も、探検学校にいつて探検しながら、おいしい水を飲みたい。本場に純粋な水はどこにあるのか、水をさがす旅をしたい、水のよいところは、アラスカのように、木も草も空も空気も、みんな美しくてゆつたりしていると思う。そう

いうところで、自然にはえた木を利用して山小屋を作り、寝袋の中から星をながめてくらすんだ。朝おきたらまずおいしい水を飲み、明るい間は川や湖や山で遊び、夜は本を読もう。きれいな水を飲んでたら、きつと頭もさえてきて良い考えがうかんでくるだらう。

大昔はたぶん自然のままのよい水ばかりだったから、それを飲んだ人間がだんだんりこうになってきたけれど、自然の水を飲まなくなった人たちは、病気などが多くなり、しまいに猿にもどつてしまうかもしれない。僕はやっぱり猿より人間がいい。自然の中で思いきりはねまわるのは猿と同じでも、本をよんだり考えたりできる人間で世界中の人にすばらしい水をプレゼントできる人間になりたい。(江別・大藤東小)

## 羽鳥みさえ

「うわあ、とても大きな氷河だ」氷の上からの冷たい風がヒューヒューウウいいて、ここで始めてわたしのアラスカへの理想と現実が一致して「ほんとうにアラスカに来たんだ」と思いました。太陽の光で湖の色がブルーに見えて、その中にどうどうと美しく氷河が顔を大きく出しているのです。

しかし、水に出している部分は、全体の1/10だから、おどろきました。なんと、9/10も水の中に入っているのです。1/10しか水に出ていないけれど、とても大きいのです。9/10も水の中にはいつていると考えるとみただけでも、さすが氷河と思うでしょう。氷河を遠くから見ると氷河というより、大きななだらかな曲線雪のかたまりのように見えますが、小さなかけらを近くから見ると、でこぼこで、ところどころに空気がはいってすきとうついています。このような氷河は、一九四〇年ごろには、約三〇〇くらいはなれた博物館のあたりまであったと聞いて、びっくりしました。

博物館のあたりは石が出っぱっていて、そこはモレン地帯というそうです。モレン地帯というのは一九四〇年ごろにここにあった氷河が、暖かくなるにつれてとけて水になり、あとに氷河がはこんできた土、石、砂などが残り、しっかりかたまつてこのような地帯になったそうです。わたしはいままでに川の方でできる地帯と、火山によつてできる二とおりしか知らなかったのに、氷河で地帯ができるなんて、まったく氷河の力は大きなあと、思いました。モレン地帯の博物館の横には、たくさん木がしげっていました。その木はシトカ

トウヒといって、木のえだがみんな西の方へかたむいていたり、へんなどころからえだが出ていました。なぜかという、氷河の方からの風、つまり、東の方からの風がととも強く、ていこうできずこうなつたと先生方におしえていただきました。この木は、自然にまけたかわいそうな木だと思われました。

その木の下には、大小さまざまな氷河の運んできた石がありました。その石の中には、たて六〇cm、横一mあまりもある石などがありません。

氷河から少しはなれた川の上流へいくと、氷河の流れたあとがありました。そのあとというのは、氷河でけずられた石でみぞのようなものが、なめらかにほらさっていました。あの遠くから見ると雪のようになめらかだった氷河が石をけずるなんてノカたいほうちようでも石をけずることができないのに。あらためて氷河の威力が偉大だと思いました。そしてその石が、そのままの状態に残っているのです。これはやはり、アラスカの人たちが自然をたいせつにしているのでしょう。

日本では、自然をたいせつにしようと、自然にしたしんで自然をこわしているといふことが多くあります。観こう地などいってごみが多めい場合など、とて

いやな気分になります。日本にも美しい自然は、たくさんあるのだからもつと一人一人が、注意を。一人だけならいいやと思う心が、たくさんの人におこつたらどうなりますか。アメリカでは、そういう自然に対してのおしえが、しつかりしているそうです。わたしも「自分だけは」と、りこしゆぎ者の一人だつたかもしれない。でも自分たちのすんでいるところの自然を、もつとたいせつにしたいということ、アラスカの大自然から学ぶことができたとおもいます。

### 須藤 寿

(札幌・藤野沢小)

八月五日の日に千歳空港をたつて東京国際空港についたとき「なんとなくやだなあ」と思っているうちに出発の時間になつた。おとうさんとわかれをつけて、飛行機にのりこんだ。なんとなくおとうさんがこいしくなつたが、とても楽しそうなのでそんなことをわすれてねむってしまった。

飛行機の中の食事もおもしろくたべられた。いよいよアンカレッジに着陸するときには失速するんじゃないかなあと思つたけれども、飛行士さんを楽しんだ。アンカレッジについてからぜいかんをとるとき、ぜいかんのおじさんが「きみの荷物はきみよ

り大きいね」といわれたので少しカッときたが、「とうしてもらうんだからいいだろ」と思つた。それからバスに乗つてアンカレッジのある食堂にいき、そこで食事をした。

食事をすましてからバスにのつて、サミットレークロッジへむかつた。ロッジについてからとまるへやと、いっしょにとまる友だち先生などをおしえてくれた。ぼくはなり田君とます尾君と遠松先生といっしょになつた。シャワーなどがついていて、たのしくてきもちがよかつた。よるねるときは、かいちゆうでんとうでいたずらなどをして、なかなかねれなかつたので、だいぶおそくなつてからようやくねることができた。

次の朝、おきてからロッジにあつまつて食事をした。たべおわつてからリスをおいかけた。それからまたロッジにあつまつてサミットレークキャンプ場へむかつた。ついでからすこし雨がふつたが、がまんしてテントをはつた。とてもつかれた。テントの中にビニールなどをしいてから、トイレなどをおしえてもらった。それから、エアーマットに空気をいれて、ねる場所をきめた。

先生が「たき木をひろつてこい」といつたので、そのへんにおちているたきぎをひ

ろつてきて、どんどもやした。女子やおにいさんたちはいものかわをむいていた。そのときぼくたちは日記などをかきながら、けしきをながめていた。ぼくたちのテントは山に近くなつていけるが、反対側はサミットレークの湖である。おくへいくほど草の長さが長くなつてくる。だから、ムースの歩いていったあとの道にたよつていった。まがつていくと草が長いので、前の人が見えなくなつてしまふ。くつていかないと、まいごになつてしまふのだ。だが山の上へいくと草がみじかくなつてくるのだ。上と下がみじかく中がながいなんて、自然というものはとてもおもしろいものだ。

昼食をすまして魚つりにいったがぜんぜんつれないのであきらめていたら、ぐいとつるごができた。それから、つれずにおわつた。夕食の時間になつた。楽しくすましてから増尾君とすもうをした。ものすごくあかるかつた。というのは、日本では八時ごろだとまつくらだが、アラスカでは八時でもまだ明るいので気がつかなくなつたのだ。

次の朝、凍りそうにさむかつた。だからもうひとねむりにした。目がさめたら、エアーマットの下にいた。どうりで

あつくるしいとおもった。なんじかと思つて時計を見たら七時一〇分だったのとびおきたら、みんなもうおきて食事の用意をしていたので、ぼくもつだった。

食事をすましてから氷河をたん検にいった。アラスカ州の色——ブルーの氷河。氷河のはこんできた岩は、子どもの高さより大きいそうだ。ぼくより大きいなんてしゃくだ。氷河の速さ一日一五センチ。一日一五センチなんて、とてもものろつぱだ。口がきけたらからかつてやりたいきぶんだ。氷河の温度マイナス三度——ひょうめん〇度、とてもつめたそうだ。きいただけでぶるぶるだ。アラスカぐま、五〇〇キロぐらいのがある。ビーバーは三〇〜四〇センチ位から七〇〜八〇センチぐらい。なんだかこれくらいの赤ちゃんいるみたい。このようなたん検旅行はとても楽しかった。

(札幌・円山小)

### 坂野孝明

ぼくがアラスカで楽しかったのは、氷河見学、レッド・サーモンの川登り、そして山登りです。そのさまざまな自然は、いつ見ても美しかったです。

ぼくたちがキャンプ生活をしたところは、ケナイ半島の、サミットレーク付近、

どこを行っても山ばかりで、ごみ一つ落ちていない自然そのものでした。川へ行けば水がすき通っているから飲めるし、またわき水などもそこらへんでは見られないような自然でした。

ぼくがいちばんアラスカの自然で心に残ったことは、氷河です。日本ではめったに見られない氷河です。夏だというのに、水のかたまりがあるのです。しかし水面から出ているのは $\frac{1}{10}$ で、 $\frac{9}{10}$ は水中にもぐっているというんだからおどろきました。

そしてもう一つ、びっくりしたことは、レッド・サーモンです。これもそこらへんでは見られない自然です。日本から見たらちょっとした小川ですが、その小川に何千何万という魚がいたのです。深さは約一〇cmで、水はすごくきれいでした。これこそ日本では見られない代表的な自然だと思います。

毎日、さまざまなことがありました。あるときは水温が二度というサミット・レークで泳いで遊びました。またあるときはキャンプ地から約kmの道のない、急な山面の山を手をはって登りました。このようなアラスカのさまざまな自然で九日間くらし、そして遊びながらもいろいろ社会の勉強になることもありました。

日本とくらべて公害もない、大自然のア

ラスカ、それはすばらしいものだと思えます。

(釧路・共栄小)

### 小坂啓太

生まれて始めて飛行機に乗って、北海道の外に出た。テレビや本で知っていたつもりだったが、本当に自分の目でみると、やはり新しい驚きだった。空から見る東京は汚く、この都に対する魅力を失った。それにくらべてアンカレッジの空や氷河の美しかったことは、いまでもなつかしく思い出される。

十日間という、ほんの短い日々だったが、夢のように楽しい毎日だった。大きい広い、自然そのもの。人と動物と森林と河と……。特に動物達とは友達だった。夜中にメロンの中味だけを上手にとりていって、僕達をくやしがらせたリス。夜中に小屋の前で、素晴らしい吠声を聞かせてくれた熊。草原で、のうのうと草をはみ、フンというおみやげをのこしていつてくれたムース。

そんな動物をみてみると、うちの犬を思い出す。おりに入れられ、鎖でつながれ、散歩も鎖つきで、コンクリートの道を爪の音をさせながら歩く。たまに郊外で放すと、うれしくてどうしようもなく、転げ回る。

この広さの中を、彼とともに走ってみたいと切に思った。

辻井先生に連れて行っていたいた、氷河のできはじめは、面白かった。雪溪の中に氷河がでかかかっていて、ツジイ・グレイシャーと名づけて遊んだ。

ここでは、万年雪を見ても、木をみても、百年千年が一目で感じられる。地軸にこしかけ、地球全体を見おろして、少なくとも百年二百年単位でものごとを考えられる人間になりたいと思った。

かけがえない地球。まだ大自然の汚れていないアラスカ。一生けんめいで酸素を供給してくれる大森林、できてから人の目にふれることなかった白い峰々、そこで神とともに生きる動物達。おとぎの世界と思ったが、しかし低開発地域の人々の発展、人口問題、その他大自然を大切にそのまましておけないもろもろの事柄が、ひしめいている。しかし僕のいまの能力ではとても自分自身になつとくさせる解決方法は考えられない。僕自身学業、テスト、成績と公害問題で苦しめられている。

地球よ、おまえもか。しかし当面は歯をくいしばり、このこんとんとした中を先に希望をもって進むよりしかたがないのだ。そしてもしも能力を身につけることができるとき、地球を少しでも、ユートピアに近

づけることができたなら、僕としては最大の喜びになるだろう。(札幌・教育大附属中)

### 山藤潤三

ぼくがアラスカに行つて感心したこと  
はやはり自然のことです。アラスカの人  
たちは、日本の人と同じとちがいます。そ  
れはどれほど動物を大事にしているかとい  
うことです。キャンプ地に、リスが出て来  
たので、食べ物をおいておくとそれはへよつ  
てきて食べていて、にげようとしません。  
人をおそれないので、びつくりしました。  
アラスカに行く前は、寒さがきびしいの  
で、日本より動物が少ないと思つていまし  
たが、行つてみればムース、トナカイ、ウ  
ルフ、ビーバー、カリブー、リスなど、た  
くさんの動物がいるそうです。

キャンプ地はまわりが湖と、えのぐで画  
いたようにきれいな山にかこまれて、ゴミ  
などは道で一つも見ませんでした。川も、  
水がすんで魚がみえました。その水も、飲  
めるくらいでした。日本の川や野山がきた  
ないので、よけいそのように感じたのでし  
ょう。でも少々アラスカにもこまること  
があります。それは物価が高いということ  
です。だけど日本のように公害で人が死ぬ  
くらいならすこしくらい物価が高くて、い

いと思ひました。ところで、アラスカはア  
メリカ合衆国のりょうどなので、自動車  
が多いかなあと思つていましたが、りっぱな  
ハイウェーに、約五百メートルか六百メー  
トルくらいに一台くらいのわりあいしか走  
つていませんでした。それは広い土地に、  
少しの人しかすんでいないからだと思ひま  
す。それにきれいな自然の中に、近代的な  
建物もあるので、文化的な生活も楽しめる  
し、自然にも楽しめるので、こんないとい  
ころはないと思ひました。永河を見に行つ  
たり、湖で泳いだり、ホテルへとまったり、  
とても楽しくてもつといたかったです。  
行つてほんとうに、よかつたと思ひまし  
た。日本から飛行機でたつた六時間で行け  
るところに、あんなにすばらしいところ  
あるとは思ひませんでした。このことは、  
たぶんわすれることができないこととし  
ょう。ぼくはもう一度あのようなところへ  
きたいです。(札幌・宮の森小)

### 荒井亨

八月五日 羽田午後六時半発、アンカレ  
ッジ着、午前七時。とうとうあこがれのア  
ラスカに着いた。アラスカの朝は、何か朝  
のような気がしなかつた。

ぼくはこのアラスカで六日間のキャンプ

生活をおくつた。キャンプ生活の中でいち  
ばん楽しかつたのは、山小屋を造つてびく  
びくして一夜を明したること、数人で氷河  
があると思われるところを、苦勞して歩い  
て行つて、千五百メートルもある山を登つ  
たということだ。

それからいろいろ見學した中で、いちば  
んうれしかつたのは約五千年前にできた  
というポータージ氷河を、この目で見たとい  
うことだ。その氷は青々としてかがやい  
ていた。ものすごく美しかつた。またアラ  
スカというところは、自然を愛する人が多  
いのだろう。というのは、ぼくが見た目  
は、道の両側がともきれいだつた。それ  
から道の両側などにゴミなどを投げたら、  
五百ドルのばつ金、日本円で約十五万円を  
取られるところもあるそうだ。日本なら道  
の両側などにきたないゴミなどが落ちてい  
るのをぼくはたまにみかけける。日本もこ  
のような、きまりをつくればいいとぼくは  
思う。

それから日本とちがうところは、まず土  
地が安いということだ。このような  
二つの点が、日本と大きなちがいだ。いま  
までのようなことが、頭の中で深くきざみ  
こまれている。

ぼくはこの十日間を楽しくすごした。

八月十四日 午後七時半ころ、千歳空港

に着いた。ぼくはくたくたにつかれてしま  
い、一週間ぐらゐ朝と夜が反対になつてし  
まつた。(札幌・東山小)

### 小笠原利充

JAL006便、アンカレッジ行き  
のりこんだ。り陸したのは午後六時半だ  
つた。初めての外国旅行に、胸がどきどき  
だ。アラスカのようにすは、どうだろう。飛  
行機は時々乱気流にのつてゆれていた。

アンカレッジについたのは、早朝だつ  
た。小雨がちらついていた中を、バスにの  
つて、サミットレークに向かつた。アラス  
カの土地は、日本の約四倍なので、町全体  
がゆつたりしていた。

サミットレークはキャンプ地で、湖あ  
り、山ありの最高のところだつたと思う。湖  
は、水上飛行機のかつ走路として役だつて  
いた。日本の自然とくらべると、スケール  
がちがつていた。それから何日間か自然と  
したしんできた。山登り、魚つり、時には  
氷河を見にいった。ポータージ氷河に行つ  
た時、日本との自然の比かくぐらべもの  
にならないくらいだつた。スワードにいっ  
たときもそうだつた。

とくに印象にのこつたのは、日本車が走  
つていたことだつた。それにアラスカの人

々は、自然を愛していることがしみじみわかつてきた。野には、ファイヤーウィードがさきみだれ、山には、動物、湖、海には魚がたくさんいた。日本とはちがっていたことがたくさんあった。

十四日の昼、アンカレッジ国際空港をとびたつた。日本について、入国手つづきをしてから北海道へ帰った。向うの人と友じょうを深めてよかつたと思う。

(旭川・大町小)

### 森嶋 靖子

私は今年の夏休みに、六十人の先生や友だちとアラスカへ旅行しました。

はじめて外国へ行ったので、めずらしいことをたくさん見たり聞いたりしたけれど、その中でも私はサミットレークでのキャンプが一番楽しかった。キャンプ場は、とがった木がたくさんはえている森の中で大きい人たちがテントをはつてくれたので私たちは雨水がテントに入らないように回りにみぞをはつたり、ロープのとめ金を土に打ちこんだりして手伝いました。

食事は大きい人も私たちも、みんなで力を合わせて作りました。しゆるいはやきそば、バーベキュー、焼魚、ラーメンなど、いろいろありました。

私たちだけで作ったビーバーゴはんは、こしよりの入れすぎで少ししつばいだったけれど、わりあいおいしかった。

みんながいつしよけんめい食事のしたくをしているとき、かわいいシマリスが遊びに来て、ごちそうを食べようとすると私たちがちかすくので、すぐにげてしまます。シマリスは、クリツとした目で、見れば見るほどかわいいリスです。

キャンプ場さいごの夜は、みんなでキャンプファイヤーをかこんで、いろいろな歌を歌いました。夜になつても、暗くならないので、テントに入つても、なかなかぬむれなかつた。

(札幌・宮の森小)

### 高野 園子

『きれいな町アンカレッジ』『人が少ない静かな町』これが第一の印象でした。アラスカは一八六七年に、ロシアから七二〇万ドルで買い取つたそうです。この州では自動車よりも水上飛行機の方が多く見られました。これは湖が多いからだそうです。

私達はサミットレークのキャンプ地で、私には初めてのキャンプ生活です。ビーバー、バイソン、ムース、ウルフ、エルク、カリブー、一クラス十人のグループに分れてのテント生活です。

大きくて美しいアラスカ。緑の森、大きな湖、故郷に帰る紅鮭の群れ、青く輝やく水河。アラスカの自然はとても素晴らしい。

川幅が五メートル、深さ一〇センチぐらいの川を背中を水面に出し、おなかを川底にこすりながらのぼつて行く紅鮭。七〇センチぐらいの真赤な紅鮭が群をなしている。手でつかもうと思えばいくらでもつかめる。でもこれとはつてはいけないそうです。昔、石狩川を群をなしてのぼつたという鮭。いまはどうしたのだらう。数えるほどしかとれないという。とりすぎたのだらうか。それとも公害で川がよくれたのだらうか。さびしいことだと思ひます。鮭のふるさと石狩川を、魚の住める川に戻せないのだらうか。水の汚ない、ゴミの浮いてる川。

北海道の川にくらべ、アラスカの川はゴミがなく、きれいな川です。どうして日本の川にはゴミがういているのだらう。アラスカのキャンプ地、道路、山。どこへ行つてもゴミが見られない。日本ではいたるところに見られるゴミが、アラスカではありませんでした。

私は日本に帰つたら、両親と妹達に公害のない自然の姿に戻す話しをし、次に近所の人、学校のお友達、さらに多くの人達にこのことを広く伝えたいと考えました。

光に輝やくブルーの水河、水河湖はミルク色でした。そしてまた川の源である雪溪を見ることができました。すこし登るだけで、高山帯に入れるサミットレークの山々。自然の勉強には最適なアラスカ。ムース、熊、リス、野鳥も沢山いる。木の枝で釣れる魚。えさもいらぬ。そんなところが日本にもあるといいなと思ひます。自然を素晴らしい状態で見ることができたアラスカ。

そしてみんなで食べる食事は、大変おいしかった。バーベキュー、サケのバター焼き。くだものは、食べ放題。サミットレークはピンク色のファイアーウィードの花盛り。湖畔や川には忘れぬ草がいつばい。友達というより兄弟のような六〇人。参加したみんなも、まだまだこのアラスカの自然の中ですごしたいと話し合ひましたが、そのようなことはできません。わずか十日間でも私にとつては夢のような大自然とのふれあひは、おとなになつても、いつまでも、いつまでも心の中のことと思ひます。

(札幌・月寒東小)

### 辻井 順

港町スワードに つりにいった。いくとちゆうに レッド・サーモンを見た。

体の半分をだし水しぶきを上げて  
いっしょうけんめいのぼっている。  
数えきれないほどあとからあとの  
のぼっていく。

パスの運転手の、ビルさんが  
手ずかみして、見せてくれた。  
とても大きく見えた。

「北海道にも、こういうような所がある  
といいなあ。」

ぼくが、山小屋にとまったのは、  
山小屋ができて、二日目のことだった。

できた日は、クマがでないかと、  
すこし、こわかった。

そうしたら、さえき先生に、

「よわむし、おまえの、おとうさんの顔が  
見たい。」

と、いわれたので、くやしくなった。  
それで、

「ようし、あしたは、ぜったい、行くぞ。」  
と、いう気になった。

とまった、次の日、こわがっていた  
自分が、はずかしくなった。

(札幌・山小)

## 成田庄一

八月五日 ぼくはきょう羽田からアンカ

レッジにむかいました。飛行機の中ではみ  
んな話をしたり、日記をかいていました。  
ぼくはうとうとしてねてしまいました。

目をさますと、日付変更線のところまでき  
ていました。いままでくらかった空がだん  
だんあかるくなりました。ぼくはもうすぐ  
空港につくと思えました。空港につきまし  
た。空港のまわりには、北海道のなんばい  
もうつくしいしぜんがありました。パスで  
町のレストランにいきました。朝食をとっ  
てから、パスにのって、サミットレークに  
いきました。湖のちかくにあるレッジにと  
まりました。

八月六日 ぼくたちは湖のむこうにある  
キャンプ場へいきました。ついでから、ま  
ずテントをはりました。きょうからキャン  
プ生活のはじまりです。まずしよくじのよ  
ういをしました。

八月七日 きょうはみんなでポータージ  
氷河を見にいきました。とてもきれいで  
す。バイソン氷河を見ると、雪がっせんが  
したくなります。そして札幌の雪を思いだ  
しました。

八月八日 きょうは山小屋をつくりまし  
た。木を切るとき、なるべくかれた木を切  
りました。りゆうはまだいきている木を切  
ると、木がすくなくなるからです。

八月九日 きょうは港町スワードへいき

ました。スワードへいくとちゆうピンクサ  
ーモンを見つめました。小さなかわをおよ  
いでいきました。スワードの港は、日本の港  
のなんじゅうばいもきれいでした。きれい  
な船がたくさんとまっています。

八月十日 きょうは湖のちかくで、きも  
だめしをしました。おどかす人が草の中  
はいって、ぼくたちはつかまらないよ  
うにと、ひっしでにげました。こんなこと  
が、札幌でもできればいいと思います。

八月十一日 夕食がおわってから、にぎ  
やかにキャンプファイヤーをしました。火  
をまん中にかこみ、うたったりおどったり  
しました。

八月十二日 きょうはテントをかたづけ  
たり、荷物のせいりをしたりしていそがし  
かったです。したくがおわると、うたをう  
たってパスをまわりました。やつとパスがき  
きました。パスのつて町のレストランにい  
きました。夕食をすませてからホテルへい  
きました。ひとやすみしてから、おみやげ  
をかいました。でも、はじめはドルのつか  
いかたがわかりませんでした。でもいっし  
ようけんめいかいました。ぼくはこの旅行  
がたのしかったので、またいきたいと思  
います。

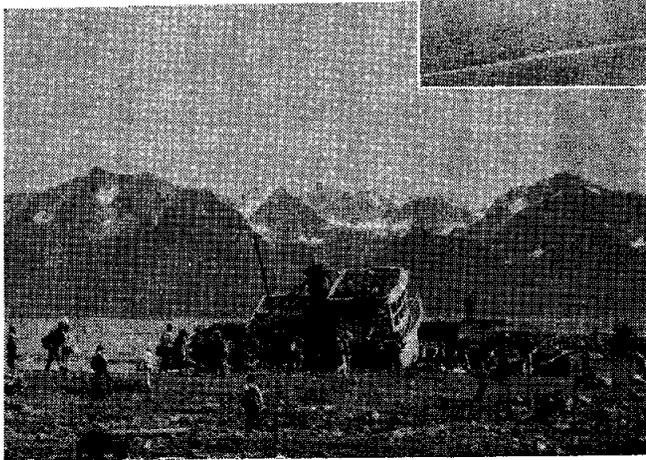
(札幌・中央小)

## 小島邦規

ぼくは今年の夏休みに、アラスカのサミ  
ットレークへキャンプに行った。ぼく達の  
名前はムースで、リーダーは佐伯先生であ  
った。南極やエベレストへ研究に行った人  
だ。

ポータージ氷河へ行った。そうして五千  
年前の水を食べた。なかなかおいしかっ  
た。氷河のけづった石はスジがあるが、長  
年の雨などでない石もあった。氷河にのぼ  
って尻すべりや雪合戦をした。八日にも行  
ったが、湖の氷山はきのうとかなり違っ  
ている。トウメイのクラゲを発見したが、ド  
ーナツのような形をしていた。九日にム  
ースを見た。大きかった。大きな角があるオ  
スで草か何かを食べていたが、時々こちら  
を向いたりした。ムースのフンも見つけ  
た。エゾシカやノウサギと同じ形で草食動  
物のものであったが、とても大きかった。  
ぼくは百コ以上もひろって父さんのおみや  
げにした。

植物はコケを見た。北海道のより大きく、  
ラップのような形をしたものもあった。色  
はうすみどりであった。においはラクヨウ  
のようなにおいであった。長さも四センチ  
くらいのもあった。コケも父さんのおみや



←スワード・フィヨルド

げにした。

父さんに見せたら、コケよりもキノコの仲間でないか、といていた。コン虫はチョウが飛んでいるのを一度見たが、どの種類かとおくてわからなかったがシロチョウの仲間らしかった。トンボも一度見た。オニヤンマにしていた。一ちよく線に飛んで行った。足長ばちを一びきつかまえた。どくびんに入れてもつてかえつたが日本のほちより体長が長かった。生物は北へ行くほど大形になると書いてあったが、そのとおりだと思った。

ぼくも大きくなったら先生のように学者になって、いろいろな研究をしたい。

(岩内・西小)

### 小 島 昌 規

八月五日に、ぼくは東京国際空港からアラスカへ行きました。初めての外国旅行で、アラスカに着いた時はすっかりきんちようしてしまいました。

ぼくのなかまは七人で名前はビーバー、リーダーは三浦雄一郎先生でした。

一日目はサミットレークのロッジにねました。そばの水は大へんきれいでした。そのわけは皆できたなくしないように注意しているためで、もしゴミをすたら

バツ金をはらわなければケイサツにつれて行かれます。ぼくたちはその水で食器をあらいました。夜になってもなかなかくらくらなりません。くらくらなくても、すぐ夜が明けてしまいますので変な感じです。

二日目からはロッジの向いがわのキャンプ地で、テントを張ってキャンプをしました。三浦先生にボートに乗せてもらったり遊んだり、湖でおよいだりました。三浦先生がヒマラヤの雪男の話をしてくれました。そしてキモだめしもして遊びました。そして小川に赤い大きな魚がたくさんおいでいたので、よく見るとベニザケでした。卵を産みに川へのぼって来たのです。ぼくたちの北海道でもサケはいますが、川を見たことはありません。

日本へ帰ってから父さんに聞いたたら、昔、北海道の川にもたくさんいたんだが、家や工場のきたない水やゴミを川へするののでだんだん魚が帰らなくなつたんだ。それに日本人は卵も食べるので、せっかく産卵に帰って来てもサケの赤ちゃんが生まれないんだ。だからこれからは計画的に魚を取らなければいけないよ、といました。最後のばんは、アンカレッジのウェストワードホテルでねました。(岩内・西小)